

報 館 書 図



★ 第67号

★ 兵庫県立三木東・三木総合高等学校 総務部 発行

「本は友だち」

私にとって、本は「友だち」です。興味のあることを共に分かち合い、新しい知識や情報を与えてくれ、どんなに嫌なことがあっても気分転換させてくれ、思いや考えの種を蒔き感情や言葉として結実してくれ、明日へのエネルギーや自信を与えてくれる——いつも一緒にいたい存在です。

私は常に異なるジャンルの複数の本を並行して読んでいて、どこで読むか、本を読む時間が何分くらいあるか、今日使う鞆に入る大きさと重さか、読了まで残り何ページあるか等によって、その日に読む本を選びます。「そんな読み方をして話がわかるのか」と思われるかもしれませんが、大丈夫、何の問題ありません。誰だって、友だちと昨日話していたことを今日も覚えていて、「昨日のあれさ」と何の説明もせずに昨日の続きを話すでしょうか？ また、「昨日のあれ」の続きを別の友だちと話し

たりはしないでしょうか？ また、友だちごとに盛り上がる話題は違うから、「この話は〇〇に教えてあげよう。きつと、大笑いするから……」と思つて、話す内容によつて共有する相手を選んでいくのでしょうか？ それと同じです。私は読んでいる本ごとに仲良く楽しい時間を過ごしていますが、内容が混ざることはいし、得たい知識や期待、楽しさや共感の程度は本ごとに異なります。それは、友だちとの会話とよく似ています。

私は本を読みながら次に買う本を探すことも好きで、Amazonのリストには常に百冊くらい入つていて、手元の新冊がなくなりそうなタイミングで、五冊から十冊をまとめて注文します。図書館で借りれば無料ですが、私は基本的に気になった本はすべて買うようにしています。それは、本を読みながら、気になった箇所や線を入れたり、短いコメントを書き込んだり、少し端を折つたりして、自分の心の琴線に触れた一瞬間に、躊躇わず本にリアクションを送りたいからです。それは、友だちとの

関係の深まりとよく似ています。

私は本を部屋のいろんな所（仕事用の机、食卓テーブル、ベッドサイド、鞆の中など）に置いていきます。読みかけの本はもちろん、読み終わった本でも、しばらくの間は表紙絵を眺めたくて、時々自分が線を入れたところだけを読み返せるようにして、部屋のあちこちに置いていきます。家族からすれば、読み終われば本棚にしまえばいいのにとと思うところでしょうが、「よし、片付けよう」と思うまで、自分の側に置いておきたいと思つていきます。それは、友だちとの別れによく似ています。一度心を許した友だちと、二度と会えないわけではないけれど、離れるのはどこか寂しく思つてしまうのです。それでもしばらくして片付けられるのは、新しい友だちができたからであり、離れても共有できたことに変わりはないと思えるからです。そして、そう思えた友だちが本棚に収まっているのを頼もしく思い、自分の友だち同士が本棚に並んでいる姿を見て、仲間が増えていく喜びを感じることもあるの

です。

大人になると、新しい友だちを見つけたことは簡単ではありません。だから、本屋やAmazonに立ち寄ればすぐに手に入る本は、「便利な友だち」です。みなさんにとってはスマホやゲームが同じような存在なのかもしれませんが、本の方が恐らく、自分のペースを守ってくれる、優しい友だちです。眠くなれば閉じればいいし、忙しければしおりを挟んだまま待っていてくれるし、続きを知りたければ続編を読めばいいし、気に入らなければ買い換えればいいのです。本を読み過ぎて怒り出す人はいません。自分本位な我が儘を無言で聞いて受け入れてくれる——本は、便利で優しく頼もしい「友だち」です。

「あいさつの教科書」

スマホやタブレットで「本」が読める時代。皆さんはどんな方法で「本」を読んでいますか。私は最近、多忙のせいにして、あまり「本」を読んでいません。自宅には何冊かあるのですが、積読（つんどく）状態になっています。ただ、読書経験ゼロかと言えばそうではなく、それなりに「本」は読んでいました。ジャンルで言えば「教育・自己啓発」「スポーツ・アウトドア」を中心に「趣味・実用」や「歴史・地理」等も読んだ経験があります。今日はそんな中の一冊を紹介したいと思います。

タイトルは「あいさつの教科書」です。著者は「挨拶教育研究会」という何ともお堅い印象を与える方々ですが、東京ディズニーランドで社員として接客等のトレーニングを担当していた指導者もおられ、あいさつの重要性を研究しているグループです。

表紙のカバーには「人間がひと回り大きくなります。」と書かれ、その裏には興味をそそるようなフレーズが並んでいました。

「いいあいさつができる人には、なぜ、いいことがあるのか？」に始まり、「いいあいさつをされる↓うれしくなる↓自分も、いいあいさつをする↓相手もうれしくなる↓うれしい人が増える、うれしい人が増える」と読者を幸せにしてくれるような流れがわかりやすく書かれており、「読んでみよう」という気持ちにさせてくれました。

【挨拶】という言葉の「挨拶」は「押しのけて進み出る」、「拶」は「せまる」という意味があり、あいさつをされたことの方が印象に残るとも言われています。読み進めていくと場面に応じたあいさつも解説されており、最後に、あいさつは「運を開く魔法のトビラ」として終えています。

授業では保健体育科、学年では生徒指導をよく担当していたので、この本はバイブル的なものとなりましたね。

私は体育教師ですが、高校時代、野球と短距離走以外は四苦八苦していました。初めて赴任した学校で実技をしながら何とか的確に指導できたのも、それぞれのスポーツに特化した「本」から学んだ知識と技術があったからこそだと思います。あいさつもスポーツも今後の皆さんの人生には欠かせないものだと思います。「本」から得たものが皆さんの人生に幸せをもたらしてくれるのであれば、少しの間でも「本」に親しむことがいいと感じました。

三木東・三木総合での残り時間を大切に過ごしてください。

「本を読むこと」

最近は一気楽に読める本を選ぶことが多くなり、自分自身の本を読む体力が落ちていくように思います。読書をさぼると、知識を増やすことができず、それは自身の話す内容の薄さにつながると反省しています。もちろん難しいことを書いている本が必ずしも良書だとは言いきれませんが、本を読んで、社会の在り方や自分自身の生き方を様々な角度から深く考えることは大切です。自戒を込めて、そのような時間をたくさん経験できるようにしたいものです。

ところで、良い作品には心に残る一節があり、それは時代が経過しても色あせることがないと思っています。

「だってそうじゃないか？ 結果がわかっているなら、ゲームをやる必要なんかない。実力に開きがあっても、楕円形のボールがうまくいぐあいには転がり、拾いもののトライチャンスが生まれるかもしれない。そんな一瞬

を期待して、試合終了（ノーサイド）の笛（ホイッスル）が鳴るまで、僕は闘いをやめない。」これは私の好きな小説の一つである三田誠広氏が書いた『やがて笛が鳴り、僕らの青春は終わる』の中にある一節ですが、この作品はかれこれ半世紀前に書かれました。おおまかには、大学のラグビー部を舞台に、「僕」たちが仲間との友情、恋愛を通してそれぞれが決めた世界に進んでいくというストーリーですが、今読み直しても、時代遅れの感はありません。ピュアな反面、少しベタなところもあります。

ありますが、十代の皆さんに読んでほしい小説の一つだと思っています。「僕」が言うように必ずしも「人生にはゲームのような清々しさ」はないかもしれませんが、高校時代というのは損得を考えず一つのことにのめりこむことができる限られた期間であると思います。もしかすると、その高校時代を過ごしたためのヒントをこの小説は与えてくれるかもしれません。

私たちが一生に読むことのできる本の数はそんなにたくさん

ではありません。是非、あなたの生き方に良い影響を与えてくれる本に出合えることを願っています。

①



「読書」

私が読書をするときは限られています。元来、あまり本は好き नाही ほうではありません。たいいてい本を読む時は気持ち減入ってしんどい時です。今とは違う世界に逃避行しようと試みるのです。そんな時、必ず手にする本は旅の本です。著者が世界各国を旅して回った時のエピソードが書いてあります。読んでいるとまるで自分も世界を旅している気分になります。世界には200以上の国があるのに私がこれまでに訪れた国は少いです。旅する前はワクワクしますが、実際、行ってみると文化や習慣の違いからしんどい目に合うことも多いです。旅先は学校みたいで、学ぶことが多く、自分の中で希求しているものが満たされる時もあります。

また本以外で読んでいるものを挙げるならば、英字新聞です。毎日ではないですが、週刊英字新聞は私の生活に潤いを与えるものとして欠かせません。理由

は英語の文章を読むのが好きなのと世界で起こった事件やニュースについて英語で触れることができるからです。新聞を読まなければ一生出会えそうにない言葉や文章に目が留まることもあります。そんな時は必ず、お気に入りのノートに自分の字で言葉や文章を書き写し、またいつかチャンスがあれば、使つてやろうと思うのです。

②



「旅と本」

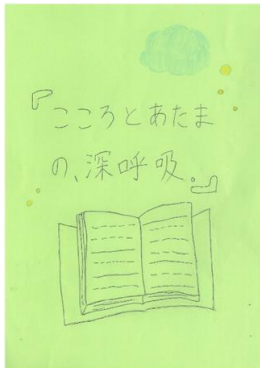
私は、普段の生活では忙しくて、なかなか本を読む機会を作れません。ただ、本を読むと自分の知らない世界を知ることができるので、興味のある本を手にして、一度読みだすと結構集中して読んでしまうという感じです。

私は旅行が好きで、昔はバックパッカーをしていたので、旅行記についてはよく読んだかなと思います。沢木幸太郎の「深夜特急」などを見ると、自分が昔、アジアを旅行してきた時を思い出し、わくわくしました。また、私は旅行する際に、もちろん世界の有名な観光地に行くのも好きですが、世界のリアルな文化や習慣を見るのも好きなので、昔はつてを探してあまり日本人が行かない所にホームステイをさせてもらい、リアルなその国の文化を体験させてもらったりもしました。例えば、モンゴルの遊牧民の移動式住居であるゲルに泊まらせてもらった

時、訪問者をもてなすために羊やヤギの解体をするのを間近で見て、人が生きるとはこういうことなのだと当たり前のことですが、考えさせられました。高野秀行のアジア・アフリカの辺境のノンフィクションや旅行記については、何冊か読みましたが、とても共感できるものがありました。

読書は、自分の知らない世界を広げてくれるものです。あまり本を読んでない人は、興味がある本があれば、手に取ってまづ、読んでみましょう。私も時間を作って興味がある本を読もうと思います。

③



「図書館で過ごす時間」

公共の図書館に行くと、建物のきれいな外観や窓から差し込む木漏れ日、草花の緑に心を癒されます。ゆつくりと、落ち着いて好きな本や雑誌を読んでいると日常の忙しさを忘れさせてくれます。図書館で時間を過ごす、本がたくさん保管してあるだけの単なる建物ではないと思えます。

図書館には本当にお世話になりました。小学生の頃に怪盗アルセーヌ・ルパンやシャーロックホームズの本にはまり、それ以降、推理小説などをよく借りて読むようになりました。大学生の頃は、図書館での過ごし方が大きく変わり、講義やゼミで読み進めている本の内容に関して調べることが大半になりました。自然科学系の本が並び図書館5階のお気に入りの定位置で、数冊の本を広げて悪戦苦闘するという日々でした。専門書は高価で自費でたくさん本を購入するというのが難し

く、図書館は本当にありがたい存在でした。

図書館の雰囲気は外の世界とは隔絶された独特な雰囲気がありました。特に公共の図書館よりも、大学等の図書館にはそのような印象があります。決して明るいとは言えない、静かで時間が止まっているような雰囲気。振り返ってみると、そのような雰囲気でなければ落ち着いて勉強するというのができなかったかもしれない。カフェのようにオープンで音楽が流れている空間では意見交換や小説を読むことはできても、集中して本の内容と向き合うということは難しかったと思います。図書館に一歩足を踏み入れてから図書館を出るまでは、自分自身も普段とは違った人になっていたのかもしれない。

今では難しいと感じるような本を読むことはなくなりました。雑誌や小説なども電子書籍ですぐに読め、電子書籍で済ませている限りは部屋が本で溢れかえるということはありません。しかし、図書館や書店にいったときの本が目の前に並び、気にな

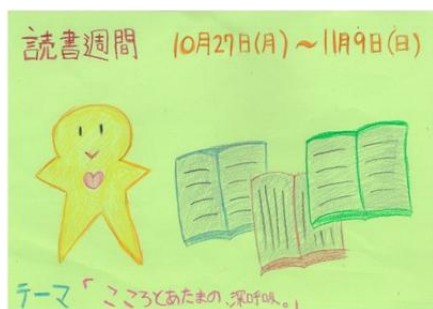
った本を思わず手に取って目を通すという習慣は昔も今も変わらないままです。

図書館での過ごし方は大きく変わりましたが、図書館で過ごす時間は私にとって今も特別な時間です。

④



⑤



「嫌われる勇氣」

「人間の悩みは、すべて対人関係の悩みである。他者がいなくなってしまう、あらゆる悩みも消え去ってしまう。」と、アドラーは断言しています。「他者がいなければ、他の人と比べることがないために悩まない。」という考え方です。他の人がどう思うかを考えすぎて、自分の意見が言えなくなってしまうことは

はないですか？他の人の視線を気にするあまり、自分のしたいことが出来なくなってしまうこととはないですか？「嫌われる勇氣」、他人を気にしなければ、もっと自由に生きることができ

る。この本は私が人間関係で悩んでいたときに姉から勧められました。

「いつも同じことで悩んでいない？相手を気にして、行動をするということは、相手に自分の行動を決められているということ。相手を気にせずに、自分の行動を自分で決めると、もっと楽になる。この本を読んでみた

ら」その言葉に今までの価値観は大きく変わりました。

多くの選択肢が提示される中で、「自分がやるかやらないか。」を自分の責任で決めませんか？悩んだときには他者を切り離して考えてみてください。

本の冒頭に「青年は幼いころから自分に自信が持てず、出資や学歴、さらには容姿についても強い劣等感を持っていた。そのおかげだろう、過剰なほど他者の視線を気にしてしまうところがあった。そして他者の幸福を心から祝福することができず、いつも自己嫌悪に陥っていた。」と、あります。

他人と比べて学歴が劣っているとか、かわいくないとか、他人と比べて悩むことではないですか。この本を読んで他者を切り離すことができたならば、このような悩みからも解放されるかもしれない。

「読書習慣」

私は小さい頃、親に本を読んでもらったことはありません。両親は共働きで忙しく、母は夜中も持ち帰った仕事を家でしていたため、私は寝るときには耳元でカセットをかけられていました。カセットテープから流れる童謡やお話を聞きながら、頭の中で物語が繰り広げられていました。

「目で字を追って物語を理解する」という習慣がなかったため、国語の時間は大変でした。文字を読むことに集中してしまい、話が全く頭に入ってこないのです。国語が苦手なので、高校時代は本をわざわざ買って読むことも借りることもしませんでした。私は本の楽しさを知らないまま、高校を卒業しました。私が本を読むようになったのは、大学時代になってからです。電車を待つ間や友達と待ち合わせる間を駅前の本屋で頻繁に過ごし、少しずつ本を読むようになりました。また、論文を

書くのに大量の文献を読む必要がありました。二十歳になり、ようやく読書習慣が身についたのです。

あれだけ苦手だった読書が当たり前になり、日本語だけでなく英語の本も楽しんで読むようになりました。そこで気づいたのは、日本語訳の本の面白さです。「そう訳したか」という訳者の苦悩やこだわりが見えたり、原作者の作品に込めた気持ちや訳で消えてしまう悲しさも知ることができました。

簡単なもので言えば、「くまのプーさん」にも作者の細かいこだわりがここかしこに見えます。ぜひ、原作と日本語訳を両方手に取って比べて見てください。原作者の言葉遊びと、日本語訳をした訳者の技術があなたの読書欲をかき立てるでしょう。

「本をめくるといふこと」

本屋は、私にとって最高にワクワクする空間です。

私は小さい頃から本をよく読む方だったと思います。「青い鳥文庫」などの児童文学で本を読み進める楽しさを知り、同じシリーズの本を次へ次へと読み漁っていました。小学校高学年、中学生になると、東野圭吾氏の推理小説に大ハマリしていたので、当時、本屋に並んでいる東野作品はすべて家にあったと思います。「本」は読むだけでなく、コレクションすることでも楽しめるのです。

高校生になるとコレクションの幅が広がり、気に入ったテレビドラマなどの原作シリーズなどに熱中しました。ドラマで味わった世界観を「本」という自分のペースで進められる時間と空間で楽しみつづ、原作とドラマの違いを探して楽しんでいました。また、国語の授業で習った「こころ」の話の続きがどうしても気になり、一冊手に入れ

て全文を読んだ経験も印象に残っています。

大学受験の頃からは忙しさにかまけて腰を据えて読書する機会が減りましたが、相変わらず本屋に行くことは好きで、いわゆる「積読」期に入りました。大学生になってからは小説よりもビジネス書や自己啓発本、教養本などを買うことが増え、その中には、カバー（表紙・裏表紙）が気に入って「ジャケ買い」した本もたくさんあります。

最近では電子書籍などもありますが、私はどうしても実物の本を好みます。それは、カバーによつて包まれた本という物体が、私の興味をそそり、読み終えた後は寂しようにこちらを見つめながら、共に過ごした世界を思い起こさせてくれるからです。また、紙をめくる感触や音は本の世界への没入感を高めていくてくれ、残り少なくなってきたページ数は、愛着の湧いてきた目の前の本との世界への別れが近づいていることを悲しくも私に感じさせてくれます。

本をめくりながら読む行為は、他者の創った世界に一歩一歩踏

「一冊の本の向こうに」

み込んでいくことに等しいと思っています。ただ、読者たちは作者の創った同じ世界にいるのではなく、それまでの人生で得てきた価値観や経験によって、それぞれ異なるパラレルワールドに存在するのだと思っています。たとえ同じ本を読んでもあなたと私で感じ方が違うのは、誰がめくるかによって、違う世界に進んでいくからではないでしょうか。自分なりの解釈で突き進むその世界はだれにも邪魔されることなく、自分の好きなタイミング、好きな場所で、自由に広げていくことができます。

たくさんさんの情報に溺れ、さまざまな制約を受けるこの世界で、たまには何のしがらみもない自分の世界に飛び込んでみませんか。本をめくる。ただ、それだけで。

今、身近にある本を一冊手に取ってみてください。

机の上の教科書、カバンの中の文庫本、タブレットの中にある電子書籍……何気なく手にした本の裏表紙や最後のページ、あなたは、そこにたくさんさんの会社や人の名前が並んでいることを知っていますか。

執筆者、出版社、発行者、印刷会社、表紙絵、カバー写真、装丁、編集委員などで挙げられる人や会社。それはまさしく本づくりに携わる人たちです。ですが、本に関わる人はこの人たちにとどまりません。

一冊の本はさまざまな人たちの仕事の上に成り立ち、私たちの元へと届けられます。文章を書き、考えを形にする「著者」。その文章を整理し、読みやすく仕上げる「編集者」。内容のイメージに沿って、文字のフォントや段落分けなどのページデザインや表紙を工夫する「デザイナー」。完成した原稿を印刷する

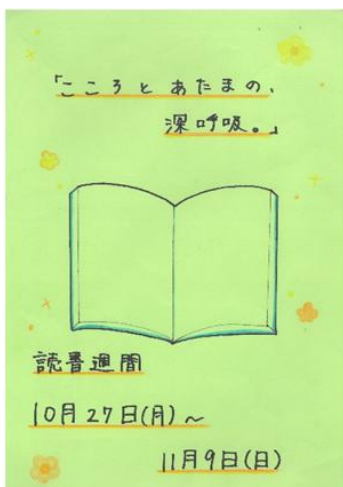
「印刷業者」。刷り上がった本を倉庫から運ぶ「運送業者」。全国に本を届ける流通を支える「取次会社」。そして、読者の手に渡るように並べてくれる「書店員」により、ようやく私たちは本を手にとることができるのです。しかし、この人たちのほとんどの名は表に出ません。いわば本に関わる「名もなき人たち」です。それなのに、そのうちの誰か一人でも欠けてしまえば、その本は世の中に届かなくなるのです。

好きな何かに関わる仕事になりたい——それは誰もが考えることです。そして、その「好き」から視野を広げてみれば、その向こうには数え切れないほどの職業がつながります。私は高校教員となる前は雑誌の編集者でした。つまり、私も本づくりに関わる「名もなき人たち」の一部だったのですが、とても充実した日々を過ごしていました。それは仕事を通じ、「好きなもの（＝本）」に携わっている」という確かな手応えを感じていたからだと思います。

いつかは誰もが社会に出て、

仕事をするようになります。もし将来について悩んでいるなら、自分の「好き」や「興味」の向こうをのぞき、想像してみてください。そこには、まだ知らないたくさんさんの仕事や生き方が隠れているはずです。一本の鉛筆の向こうに、黒鉛を掘るポディマハツヤさんがいるように。

⑥



「覚悟の磨き方」

故に、夢なき者に成功なし。
という言葉です。

何気ない言葉にも、とても深い意味がこもっているなと感じました。

私は、幼少期より本を読むことが実は結構好きで、小学校くらいの中から、様々な本を読んできた思い出があります。

その数ある本の中で、特に感銘を受けた本を紹介します。

皆さんは、吉田 松陰という人を知っていますか。もしかしら歴史の授業で習ったことや聞いたことがある人もいるかもしれませんが、吉田 松陰といえば、江戸時代に私塾である「松下村塾」という塾を作った教育者であり、思想家です。

私は、吉田 松陰の言葉を訳したこの本を見つけたとき、とても言葉にならない感情が湧いてきて、とても釘付けになりました。

そこに書いてあった一文を紹介します。

『夢をもとう』

夢なき者に理想なし、
理想なき者に計画なし、
計画なき者に実行なし、
実行なき者に成功なし。

「本との出会い」

皆さんは、夢や目標を持っていますか。もしかしら、今はまだない人もたくさんいるかもしれません。

でも、それでもいいです。これからの長い人生の中で、人に語れるくらい大きな夢や目標を見つけてみましょう。それを見つけるために、いろんな経験を自ら率先して行いましょう。

そうすれば、自分の得意、不得意がわかり、選択肢の幅が広がります。何気ない勉強も、自分の将来の選択肢や可能性の幅を広げるのだと思えば、やる意味がありますよね。

皆さんは、自分を変えるきっかけとなる本に出会ったことがありますか。本を読むことは、自分の成長のきっかけを与えてくれると考えています。

ぜひ、自分が変わるきっかけになるような本を見つけてみてください。

本との出会いには、どのようなものがあるでしょうか。今はネットの時代だからこそ、検索すればすぐに目当ての本を見つけることができます。一方で、書店や図書館で偶然手に取る本、あるいは誰かに紹介されたり、贈られたりして出会う本もあると思います。

「書斎の鍵」という本は、私がこれまでに贈ってもらった本の一つです。主人公は、若い頃から父に何度も読書を勧められていたものの、それを素直に受け入れず、四〇代になっても自分の不運を嘆くばかりの営業マンとして冴えない毎日を送っていました。しかし、ある日、部下が契約を取ってきた大口取引先を訪れたことをきっかけに、彼の人生は少しずつ再び動き出していきます。

この本は、私が学生時代、日々の授業に加えて、研究やアルバイト、就職活動に追われていた頃、ある方が贈ってくれた本で

す。研究では、他の学生との実力差に直面し、悶々とした日々を過ごしていた私にとって、この本の中で出会った言葉は、幼少期から私のことをよく知る贈り主からのメッセージでもありました。

なぜ、あの人はこのタイミングでこの本を紹介してくれたのだろうと考えをめぐらせ、登場人物の境遇に、その時の自分の状況を重ね合わせながら、物語を読み進めていくことで、自分の気持ちに初めて気づかされることがあります。他人と比較して悩んでしまう時期や、閉塞感にとらわれそうになる日々に、自分のことを深く理解してくれている人からのメッセージとともに受け取る本との出会いは、とても印象深く記憶に残るのだろうと思います。

「本が記す記憶」

私は幼いころから読書は苦手で、今まで読んできた本の数は微々たるものでしかありません。少しその経緯を記します。

例えば、小説において登場人物と背景描写がリンクする表現はよく見かけられると思います。主人公の気持ちやネガティブからポジティブになったとき、ふと空を見上げると雲の隙間から日の光が差ししていたというようなやつです。しかし、理系脳の私にはなぜそのようなことが起こるのか、全く理解できなかったんですね。あまりにも非現実すぎというか、「なぜ」という気持ちが強すぎて受け入れられない感じ。きっと非現実さが小説の良い部分ではあるのでしょうか、おかげさまで登場人物の心情も読み取れることは稀であり、国語の成績も散々なものでした。

ところが、そんな私でも本の素晴らしさを感じる瞬間はあるんです。これは大学等で目にすることが多いですが、いわゆる

「学問書」と呼ばれるもの。

現在の中学校や高等学校の数学の教科書で掲載されている概念(単元)や定理といったものは、発見された当時では数学の世界においてもすごい革新的な、重要なものだったんですね。それをあたかも「普通ですがなにか」のような雰囲気ですと記されている。いや、そうじゃない。そこには紀元前にまで及ぶ、先人達が築き上げてきた知識と努力の結晶が記されている。

この結晶を現在まで紡いでくれるものが、まさに本なわけですね。本は先人達の記憶を残してくれる。それらの記憶を基に、この世界は進化し続けています。みなさんも、こんなに素晴らしき「本」というものと向き合って成長できる機会を是非楽しんで過ごしてください。

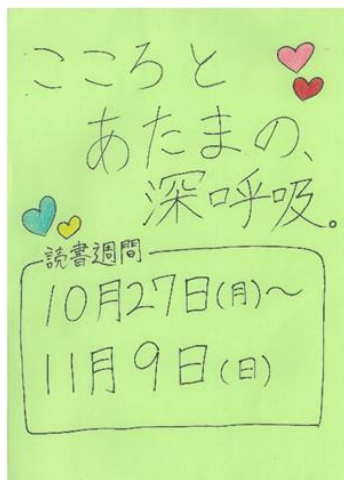
「本の思い出」

「本」というと、高校の課題を思い出します。高校一年生の時に二か月に一度、読書感想文の課題がありました。三人の国語科担当の先生が選んだ一冊が課題になります。本には選んだ先生の個性があらわれていて「この本は〇〇先生だ。」「前の本は△△先生がいよね。」と友達と話してました。本を読むのは好きでした。しかし、与えられた本を決められた期間に読んで感想文を書くというのが面白くなくて、適当に読んで、適当に感想文を書いて提出してました。あまり印象に残らなかった本達ですが、少し大人になって本棚からふと取り出して読んでみると、どの本も面白くて、もう一度全ての本を読み返していいました。「先生はすごい！あの時はもったいないことをしたな。」と思ったものです。読む時が違えば本印象が変わるのは本の面白いところだなと思います。本は自分で購入することになっ

ていたもので、後から読み直してその本の良さが分かる事も先生方はお見通しだったのだろうなと思います。

興味を持って読んだ本。なんとなくや、しょうがなしに読んだ本。本との出会いはいろいろありますが、どの本も読んだ人の心の中に積み重なってその人を作っていくのだらうと思います。大人になる前の学生の時に色々な本(誰かのお勧めは特に)を読んで自分を作っていった欲しいなと思います。

⑦



「変わらない気持ち」

私は、幼少期から本を読むことよりも外で遊んだりゲームをしたりすることが好きでした。

自分で小説などを買ったことはないかもしれません。ただ、すごく好きな本のジャンルがあって、それは漫画です。皆さんは漫画と聞いてどのような印象を抱きますか。「アニメのほうがいい」や「高い」など様々あると思います。ただ、その漫画に対する悪い印象というものが私にはすべて魅力的に感じます。

アニメのほうがいいという人もいますが、私も正直アニメのほうがいいと思います。ただ漫画のいいところは自分で想像できることです。たとえばモノクロで連載されている作品では、キャラの髪の色、空の色、技を出した時の色などを展開に応じて自分で考えることができます。さらに、セリフも文章から抑揚を読み取り声の高さなども想像することもできます。

またアニメを見たときに「想像と違う声やった」とか「想像してたよりアニメの声のほうがいい！」などの楽しみ方もできます。なにが言いたいのかというと、漫画は読む人によって受け取り方が違う、一人ひとりの唯一無二のものということです。

他には「高い」という人もいます。私も正直高いと思います。一冊五百円もします。もつとするものもあります。ただ、自分のお小遣いから一冊ずつ集めてすべてそろった時の優越感は何物にも代えられません。このように漫画には魅力がたくさん詰まっています。

私の漫画愛はわかっていただけたと思いますので、漫画のおすすめの楽しみ方と作品を教えたいと思います。

まず、楽しみ方は一巻しか出ていない作品を読み始めることです。今は一気読みなどが流行っていますが、三か月に一回の楽しみに漫画を読むのも粋です。また、おすすめの作品は「NARUTO」という忍者のバトル漫画です。友情、師弟関係、裏切りなど本当にたくさんある

とを学べます。私の人生の全てです。もちろんバトルシーンもかっこよくて小学生の私の心を鷲掴みにした作品です。皆様もぜひ一度読んでみてください。

⑧



「図書館へ行く」

私は学生の頃、「私の趣味は読書です」と言ってみたくないと憧れをいだき、読書好きを目指して、何度かチャレンジしてきましたが、読書習慣は全く身につきませんでした。そんな私ですが、子供が生まれてからは本と関わる機会が以前より増えました。

子供が通っていた保育園では毎月1冊の絵本を届けてくれる「月刊絵本」という仕組みを取り入れられていました。「月刊絵本」のおかげで、苦手だった本に触れる機会が増え、いつの間にか「今月はどんな絵本が届くのかな？」と子供と一緒にワクワクするようになっていました。読書が苦手な私にとって絵本は、読みやすく、また心を癒してくれるたり、気持ちを軽くしてくれるように思います。絵本と関わる時間は、長くはありませんが、慌ただしい毎日の中でのちょっとした息抜き時間になっています。

三木東・三木総合高校にも馴染み深い絵本がたくさん置かれています。子供時代に出会った懐かしい本を改めて読んでみると「えっ？こんなテーマがあるんだ！」という新たな発見があるかもしれません。ちよつとした息抜きに絵本を手にとってみてはいかがですか？

⑨



「図書館へ行く」

みなさんは、本を読んでいますか？

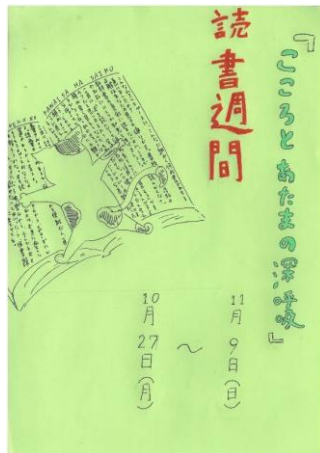
私はなかなかゆつくり本を読む時間をとれていません。高校時代には友人と本を回し読みしていました。社会人になってからは通勤時間に友人が薦めてくれた本や話題の本を読んでいました。純文学からミステリーまで幅広く読みます。

現在、本を読む時間は無くなり逆にスマートフォンを触る時間は増えました。面白そうな本を見つけてスマートフォンで電子書籍を読んでいます。

最近読んだ作品の中で「手紙屋」就職篇」は皆さんにお薦めしたい作品です。進路を決めないといけない高校生に良いんじゃないかなと読んでいる時に思いました。

他に「DOG SIGNAL」は飼っているトイプードルのトレーニングの参考になり良かったです。読んだ人がこの学校の中に、もしいたら一度話してみたいで

⑩



す。そして犬を飼っている人も飼っていない人も動物が好きな人にお薦めしたい作品です。本を通じて生徒の皆さんとお話しする機会が出来たらうれしいです。今日の昼休み、図書館へ行ってみようかな。

⑪



⑫





さし絵協力 図書委員

① 2年4組

② 3年5組

③ 3年5組

④ 3年4組

⑤ 2年4組

⑥ 2年2組

⑦ 1年3組

⑧ 1年2組

⑨ 1年2組

⑩ 3年4組

⑪ 3年1組

⑫ 3年1組

⑬ 3年3組

編集後記

この図書館報は、昭和五十五（一九八〇）年六月一日に創刊し、今年で四十六年目を迎えました。

毎年、新着任の先生方に原稿をお願いし、図書館報をつくっています。今年度は十七名の先生方に執筆していただきました。今年度も先生方のご協力のおかげで無事に図書館報を発行することができました。興味深い内容ばかりですので一読いただきたいと思います。

一学期は勉強をする場、読書の場として活用していただきました。「また行きたいと思える図書館」を目標に、引き続き図書委員と活動が続けていきます。毎月発行の Library も「楽しみにしています」というお声をいただきます。ありがとうございます。最後に、ご多忙な中、原稿執筆していただいた先生方、本当にありがとうございました。心より感謝申し上げます。